
雨のひととき

FLASH

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨のひととき

【Nコード】

N9739D

【作者名】

FLASH

【あらすじ】

「ああ女神さまっ」の二次創作小説です。螢一×ベルダンディーです。メインとはいえ、多いなこの話（笑）帰り道、急に雨に降られたふたりは雨宿りすることになって……。……進むか、退くか？

寒さがわずかに緩み、どことなく生暖かさを含んだ空気が漂っている。闇夜の中でもまだ暗い曇天からは、雨がさらさらと降っていた。

そんな中を、螢一とベルダンディーは急ぎ足で駆け抜けた。螢一は、ベルダンディーの手を引きながら忙しく辺りを見回している。

暗闇の中に街灯が作り出すいくつもの光の輪を抜け、なおも走り続ける中、不意に螢一の顔に安堵の表情が浮かぶ。彼はつないでいた手にやや力を込めた。

「ベルダンディー、こっちへ！」

「はっ、はいっ！」

雨足がやや強まるのと、ふたりがようやく見つけた安全地帯に飛び込んだのは、ほぼ同時のことであった。

雨が降り出したのは、ふたりが連れだって「ワールウィンド」を出て、しばらく経ってからのことだった。

もっとも、自らの足で帰るというのは予定された行動ではなく、その日もいつものように、ふたりは螢一の愛車で帰るつもりであった。いささか寒さが緩んできたこともあって、バイクが作り出す合風と共に家路につくのは、なかなか良い体験になると思っていたほどであった。

ところが、店を出るまさに直前に、彼のBMW、オスカー・リープマン・スペシャルは急に機嫌を損ねてしまった。いくらスターターをキックしても、愛車はうんともすんとも言ってくれないのだ。

「あちゃあ、一体どうしたってんだろうな……？」

飛び降りた螢一はあわててチェックにとりかかるが、ふだんの整備を欠かしているわけでもないのに、一体何がどうなっちゃってるんだか、原因がさっぱりつかめない。

そうこうしているうちに、ひそかな焦りも加わってあれこれと首をひねる彼の背後から、

「森里くん、今日はもう諦めてまた明日にきなさい。バイクならここに置いてけばいいし、カバーもあるし」

と、どこことなく見かねた口調で千尋が声をかけた。

「そ、そうですね……」

正直、故障をほり出すというのは、螢一のエンジニアとしての性が許さなかったのだが、原因はどうやらだいぶ入り組んでいるようだし、今からやっていてはどれほど時間がかかるか、まったく見当がつかなかった。

螢一はうなずきがたい声音を残したまま立ち上がり、ちらりと時計に目を走らせた。ひどく遅いというわけではなかったが、明日への影響が気にならない時間帯というわけでもない。

やっぱり、やってくか。

しばしの思考の後にそう決意しかけ 傍らの気配に気がついた。螢一はふっと表情を緩めると、千尋に向き直る。

「そうですね、今日は電車で帰りますよ。すみませんが千尋さん、シート貸してもらえますか？」

「いいわよ」

ふたりのやり取りに、ベルダンディーはほっと息をつくと、胸元で組んでいた手をそっと緩めた。瞳には、螢一への気遣いの色が浮かんでいる。

螢一はそんな彼女に小さくうなずいて見せた。ベルダンディーも笑みを浮かべてうなずき返す。

ワールウインドの一同は、ここのところ珍しくも重労働といっていいほどの業務をこなし続けていたから、ベルダンディーの懸念はもつともであるとも言えた。

それでもあるいは、螢一ひとりだったらそのまま修理を始めていたかもしれない。だがそうなれば、ベルダンディーはひとりで帰ろうとはしないであろう。

まあ、一緒に家でお茶するって決めたんだしな。

多少の照れを感じつつ、彼は心の中でつぶやいた。

奥からシートを引き出しながらふたりのようすを目にとめた千尋も、また小さく息をついた。

やれやれ、ホントにおあついで……ひとりものには目の毒よねえ。

それほど本気で考えていたわけでもないが、いつのまにやら千尋の口元に苦笑が浮かんでいた。

ベルダンディーの様子に気がついていたのは、ひとり螢一だけではなかったのである。

そんな次第でふたりで散歩のような帰路についたのだが、あいにくと天気はそれにつきあう気はなかったようだ。

ふたりが飛び込んだのは、公園の一角に植えられた常緑樹の陰だった。幾重にも重なる木の葉が雨に抵抗し、わずかな傘を作り出している。

ようやくのことで一息つくと、螢一は顔についた滴を軽く拭った。「ふうつ。……とりあえず、雨が止むまでここで待とうか」

「はい。でも、このくらいの雨でしたら、私が避けるくらいはできますけど……」

ベルダンディーの言葉は真実であつた。実績もある。それは螢一も承知していた。

だが、小首をかしげるベルダンディーに、螢一は小さく首を振った。

「このくらいだからこそ、余計な力を使わせるわけにはいかないよ。それより、かなり急がせちゃったけど大丈夫かい？」

「あ、はいっ」

ベルダンディー自身は、力を使うことを「余計」だと思つてはい

なかったが、螢一の表情に気がつくやと素直にうなずいた。
心地よい好意は、素直に受け取るべきであった。

雨はただ降り続ける。遠くの街灯の光がぼんやりと傘を被り、あたりにおぼろな光を投げかけていた。

「なかなか止みそうにないなあ……」

薄暗がりの中で、螢一の顔にかすかな後悔が浮かんだ。

ああ言いはしたけど、少々無理してでも走ったほうが良かったかなあ？

雨脚をみていると、そんな風にも思えてくる。

と、不意に横合いからハンカチが差し出された。

「えっ？」

「濡れたままだと、体に良くありませんよ」

いつの間に取り出したものか、ベルダンディーは手にしたハンカチで螢一の額を拭いはじめたではないか。何と言ったらしいものか分からず、螢一は黙ってなすがままにされていた。

ハンカチからか、それともベルダンディーか、かすかに花のような香りがした。

「あ、あのっ、もう大丈夫だからっ！ ほ、ほらっ」

「そうですか……？」

まだあちこち濡れているようにも見えるのだが、ベルダンディーは思わず手を止めた。螢一は、自分の心臓の鼓動が彼女に聞こえないかと、そつと様子をうかがう。

大丈夫のようだった。

あ、焦ったあ……。

契約として、そして次には互いの意志としてつきあい始めてからの年月は、さして短いものでもなかった。それでも螢一は、いまだ彼女が隣にいるというだけで、頬が熱くなるのを抑えられないことなどさらにあった。

この辺りがいわゆる「小学生以下」と言われるゆえんなのであ

ろう。今だって人気のない公園でふたりきり、という状況を理解しているものかどうか、はなはだ疑わしいところがあった。

だが、ウルドを初めとする周囲の者たちの見方は、必ずしも正しいとはいえなかった。螢一にもなんというか、それなりの「望み」がないといえは嘘になる。

ただ、状況とタイミングがことごとく彼を裏切り続けているだけなのだ。

……もつとも、そのタイミングを掴むための一歩は、自分の足で踏み出すものでもあるのだが。

そんな状況を見かねたものの、雨脚が更に強まる気配を見せた。ふたりが雨宿りをしている木は必死の抵抗が続けているが、雨量が増せばすべて防ぐというわけにはとうていいかず、細かなしずくが螢一たちのそばにも落ち始めた。

「きやつ」

小さい叫びに慌てて螢一が振り向くと、ベルダンディーが肩にかかったらしいしずくを払っていた。ひとつ、またひとつと彼女の傍らをしずくが掠めていく。

螢一は声を上げかけ　しばしとまどいの表情を浮かべていたが、やがてなにやら意を決すると、顔を赤らめながら手をベルダンディーの肩にかけ、そつと引き寄せた。

「螢一さん？」

「そ、そのさ、こつちの方が、まだたぶん濡れないから……、その……」

一言言ったびに心臓が跳ね回るようであったが、螢一はどうにかそれだけの言葉を押し出すことに成功した。

螢一の言っていることは事実であった。彼の立つあたりには、少なくとも目立つほどに雨粒は落ちていなかった。

この、螢一にしては意外な行動に、ベルダンディーは初めきよとんとした表情を浮かべていたが、やがて花がほころぶような笑顔が

浮かんできた。

「はいつ。……ありがとうございます」

ほのかに胸があたたかくなる。彼女はその想いのままに、頭をそつと螢一の肩に持たせかけた。

さて困ったのは螢一である。

このくらいで困るなという気もするが、ともあれ彼は己のなした行動の結果に、すっかり困惑してしまっていた。

ど、どうしよう。これからどうしたらいいんだっ？

そんなことは、自分で考える。

……まあ、単なる気遣いからの行動で、少なくとも彼にとっては予想外の反応が返ってきてしまったのだ。こういった行動が気遣いから、というのが、螢一を螢一たらしめてる要素なのだと思えば、彼を一概に責めるわけにもいかないであろう。

下手に力を入れたら壊れてしまいそうな華奢な肩。腕から伝わるぬくもりと、頬をくすぐる髪。

そしてなにより、彼を捕えて離さぬ彼女の優しい香りに、螢一の脳内はすでにオーバーヒート気味ですらあった。あたりの雨すら、下手をしたら蒸発でもしたかもしれぬ。

それでも、この手は離さない。

なぜならそれは、彼の素直な想いでもあったから。

今度こそ鼓動を聞かれるかと戦々恐々としていた螢一の耳に、静かな、だが優しい歌声が流れ込んできた。

「え？」

ベルダンディーが歌っていた。

ひとつひとつの音が雨音と響きあい、溶け合いながら、彼女の歌は静かに流れていく。螢一はいつの間にか、自分がひどく落ち着いていることに気がついた。

「いい歌だね」

「えっ？」

どうやら、彼女自身は自分が歌っていることに気がついていなかったようだ。

「あの、なんだかとてもいいリズムと、その、あたりの空気が素敵だったので、思わず……。すみません」

「いや、そんなことはないよ。すごくいい歌だと思った。なんだかとても楽しそうに思えたんだ」

「それは、もちろんです。だって、素敵なりズムを聞きながら、螢一さんと一緒にいられるんですから……」

頬を桜色に染めながら、ベルダンディーは蚊の鳴くような声でささやいた。落ち着いたはずの螢一の心臓が、再びタップダンスを踊り始める。

「……やっぱ、雨宿りして正解だったかな」

「えっ？」

「い、いや、なんでもない……あれ？」

螢一はあたりに視線を向けながら、鼻をうごめかす。先ほどから彼を包んでいるのはまた別の、だが甘く優しい香りが湿った微風とともに流れてきた。

「この香りは、確か……」

「螢一さん、あそこを」

ベルダンディーが指差した先には、月桂樹に似た葉を持つ低木が、わずかに薄紅がかった白い花をつけていた。

春告花のひとつ、沈丁花である。

「きれい……」

ふたりの顔に笑顔がほころぶ。

沈丁花は、再びさらさらと降っている雨の中、あたりのわずかな明かりに誇らしげに花々を浮かび上げらせ、その名の元となった芳香を漂わせていた。

再びベルダンディーの口から旋律と歌声がこぼれ出た。

沈丁花　沈丁花　毬のような花よ　妙なる香りよ……

いつの間にか雨音も遠く去り、彼女の声だけが静かに響く。螢一は穏やかな表情のまま、その歌声に聞き入っていた。

これで、いいじゃないか。

今の彼は、思わぬ時間がもてたことに素直に感謝していた。

別に、焦ることはないのだ。ふたりの間にはふたりに合った道が必ずある。

そう、信じる。

ならば今、何を焦ることがあるだろうか？

彼女の歌声が、ふっ、とやんだ。

「？」

「螢一さん、ほらっ」

いつの間にか雨は上がっていたらしい。あたりはわずかに青白い光に包まれていた。

天を仰げば、おぼろ月がふたりを静かに見下ろしていた。

「……そろそろ、行こうか？」

「ええ。帰ったら、すぐにお茶にしましょうねっ」

「そうだね……」

螢一はいささかぎこちないながらも、すっと手を差し出した。しっかりと手と手がつながれ、ふたりは再び家路に向かう。

きっと、今日のお茶もおいしいことであろう。

たった今の雨宿り、そして家での何気ない時間。

願わくば沈丁花の花言葉のごとく、そは永遠の時間ならんことを。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9739d/>

雨のひととき

2010年10月8日15時46分発行